

# 顔文字の取捨選択における心理

小嶺 翼 (22111142tk@tama.ac.jp)

## 1. 問題と目的

本研究は木村・山本(2014)を参考に、メッセージにおける顔文字の取捨選択にかかわる心理状況を調査する。

木村・山本(2014)は「したこと又はされたことに対しては、同じことをされる又はするだろう」という「返報性の規範」を基準にメール・コミュニケーションにおける顔文字についても返報性の規範が起こるだろうという予想をもとに行われた研究である。

そして結果は受信メールに絵文字があるとポジティブ感情を抱きやすく、特に送信者が顔文字のない謝罪メールを送りその返信に顔文字がついている場合より大きくポジティブ感情を抱き、この場合のみ返報性の規範を無視した結果になった。

自身の研究では送信する側に注目し、「どんな顔文字をつけるのか」というメッセージアプリでの顔文字の選択についての心理状況調査を実施する。

## 2. 方法

本研究で使用する項目は以下の通りである。

1. 「財布忘れちゃったから今日お金貸してくれない?○」

というような“恥”がからむ文を提示し、最後の○に入れる顔文字を複数の選択肢から選ぶ。

2. 次に選ばなかったほかの選択肢一つずつなぜ選ばなかったのか、成田・寺崎・新浜(1990)の状況別羞恥感情質問紙における4つの因子「かっこ悪さ」「気恥ずかしさ」「自己不全感」「性」を割合で答えてもらう。

3. 次に成田・寺島・新浜(1990)の状況別羞恥感情質問紙の尺度から一部抜粋し、その尺度に“まったく恥ずかしくない”“どちらかといえば恥ずかしくない”“どちらかといえば恥ずかしい”“非常に恥ずかしい”の4尺度で回答してもらう。

上記の質問項目から平均値を算出し、相関分析を実施する。

## 3. 結果の予測

例えば方法2においてかっこ悪さを理由に選ばなかった割合の多い人が、質問のほうでもかっこ悪さにおける恥ずかしさの数値が高いという相関が出るのではないか。

## 4. 問題、改善点

現状課題となっているのは以下の2点である

1. メッセージの文によって羞恥心に関する4つの尺度に偏りが生じる

2. 当てはまる顔文字をいくつかに絞る時点で主観が入ってしまう。

→これらは予備研究を行い、その文、選択肢に違和感がないようにする予定である。

## 5. 引用文献

木村昌紀, & 山本恭子. (2014). メール・コミュニケーションにおける顔文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響. *感情心理学研究*, 22, 17-17.

成田健一, 寺崎正治, & 新浜邦夫. (1990). 羞恥感情を引き起こす状況の構造: 多変量解析を用いて. *人文論究*, 40(1), 73-92.